

「食道腫瘍の臨床病理」

東京女子医科大学助教授・消化器病センター 井手 博子 著
東京女子医科大学教授・消化器病センター 遠藤 光夫

愛知県がんセンター研究所所長
長 与 健 夫

この書に目を通してまず驚かされるのは、その後半の2/3以上のページに盛られた切除食道の生々しい肉眼標本のカラー写真や、そのシェーマの美しいとも言いたくなるほどに見事な出来ばえと、各例についての白黒写真による組織像の鮮明さとその説明の的確さである。私はかねがね肉眼像と組織像との間の有機的なつながりの重要性を指摘してきたが、本書はその生きた手本とも言えることができよう。早期癌を含め、これほど数多くの各疾患の典型例を選出された背後には実に1,000例を超す切除例があることを、また前半に記述されている統計の図表などでそのことがよく納得させられる。まさにローマは1日にして成らざることを思い知らされる。

遠藤、井手両先生は、東京女子医科大学消化器病センターの開設当初から

一貫して食道疾患の診療に当たってこられ、外科医として毎日の骨の折れる仕事を終わった後、夜遅くまで検査室で、ルゴールやアルシアンブルーによる切除食道の染め物屋さんにも似たマクロ染色と、その微に入り細を穿った検査およびその組織変化との対応などに精を出してこられた。この書は技師諸君、諸嬢の多大な協力があってはじめて実現に漕ぎつけたことも確かであるが、何よりもまず両先生が率先して検査・研究に情熱を傾けられた賜物であることを私はよく知っており、そのような意味を込めてこの本の出版に深い敬意を捧げると共に心からお祝いを申し上げます。

この本の趣旨は、その巻頭に両先生の恩師である中山恒明先生が書いておられる次のような文章に尽きるところ。

“食道腫瘍の手術は近年安全におこなわれる様になりました。しかしながら、その切除標本の肉眼所見と病理組織所見との関係、病理所見と臨床経過および予後との関連などについて詳しく検索してまとめあげた本はまだこれまでに出版されていません。一施設で多数の症例を扱う事が極めて困難である点にその原因があります。今回、遠藤光夫教授ならびに井手博子助教授が1,000症例を越す食道切除標本につき肉眼所見と病理組織所見との関係を検討し、それらの臨床経過を詳細に分析した成績をこの一冊の本にまとめました。”

食道疾患に関する限り、このような書は今までに出版されたことはなく、またこれから容易には出版されないと思う。これだけの内容を網羅し、その根底となる資料を持っている所は世界中のどこを捜してもないと思うからである。

各疾患についての参考文献もよく吟味され整理されており、こと食道の腫瘍に関する限りこの上ない良い手引書として広く推薦したい。

A4判, 394頁, 1984年
34,000円, 送料600円

医学書院 刊